

実践女子大学所蔵

物語関係古筆切目録稿

——伊勢・源氏・狭衣——

横久別
井下府
裕節
孝利子

緒言

本学所蔵の『源氏物語』関係の古筆切については、本誌の連載で横井孝が既にこれまで二〇点ちかくを紹介してきたが、二〇〇点に垂んとする所蔵断簡の全貌を示すには、これまでの紹介の進み具合では、あまりにも前途遼遠というほかはない(もつとも、別途『実践国文学』第九〇号・九三号などで言及している例もあるが)。

一方では、源氏物語古筆資料集の出版計画が持ち上がり、本学所蔵品だけでなく、趣旨に賛同する諸賢が秘蔵の古筆切を持ち寄って執筆陣に加わって下さることが決定的な後押しとなつて、かなり具体的なかたちで進行している。『古筆学大成』第二三・二四卷の『源氏物語』関係の古筆の約一六〇点というのも、当時としては破天荒な集成事業であり驚嘆するほかなかつたが、情報の流通などの時代革新もあつてか、今回の企画は、諸氏のご協力によつて、おそらくはその二倍量超の情報を世に発信することができるはずである。

となると、もはや本誌でのんびりと「目録稿」の連載を続ける意義が急速に薄れてきつつある情勢ではある。ただし、未紹介の手鑑などには、『源氏物語』以外の物語作品の断簡もいくつも見出すことができる。『源氏』のそのように意識的に集積したわけではないから、数としては寥々たるものでしかないが、当該物語の研究にも意義のあるものであると考えられる。

本学図書館蔵古筆手鑑『筆陣』は、劈頭に大聖武を据えた堂々たる手鑑であり、これまでに鑑定をいただいた諸氏からも高評を頂戴しているが、他の手鑑と比べても、物語切を多く含むところに本手鑑のひとつの特徴がある。そのうち『源氏物語』については、上記の公刊事業でひと足はやく世に出ることになろうが、ここではそこには搭載されない

『源氏』以外の物語作品の古筆切（一部『源氏』を含む）を中心にその一部の紹介をこころみたい。ツレの探索などにも、読者諸賢のご教示を待ちたいためである。

なお、古筆手鑑『筆陣』については、近い将来、文芸資料研究所の運営企画によって、その全体を公表する予定である。公刊の形態はいまのところ未定ではあるが、詳細はそれにすべてを譲りたい。

例 言

本稿は、「源氏物語古筆切目録稿」（本誌第三四号〜第三六号連載）に準じて、本学所蔵の特に物語文学作品の古筆切を紹介するものである。

掲載内容は、国文学研究資料館編『古筆への誘い』（三弥井書店、二〇〇五年三月刊）に準拠し、「鑑定」（本文）（筆者）「解説」の項目をあげた。次に各項目について、同書より引抄する。

〔鑑定〕 「極札・正筆書・裏書・箱書など、当該切を鑑定した諸資料の記載を掲げ、可能な限りその図版を挙げた。

鑑定印については、（琴山）（守村）など丸括弧内に印文を示したが、解説不能箇所には■印を付した

〔書誌〕 「当該切の縦横の寸法……料紙などについて、基本的な書誌事項を記した」

〔本文〕 「当該切の翻刻本文を掲げた。……なお、解説不能箇所には■印を付した」

〔筆者（伝称筆者）〕 「……極札など鑑定によるものについては《伝称筆者》としてその名を掲げた」

〔解説〕

〔参考〕 本目録の新設項目。当該古筆切について直接間接に言及した文献を明記し、詳細な検討はそれに譲ることとする。

なお、「所蔵」欄に関して、実践女子大学所蔵の古筆切は図書館（日野・渋谷）・文芸資料研究所・国文学科研究室に分蔵しているが、学内における区別は対外的に意味のないものとして省略する。

また、本稿は別府が『伊勢』、久下が『源氏』『狭衣』の古筆切を担当し、別府・横井が補筆した。

■ 伊勢物語

〔二〕 伝近衛政家筆四半切（伊勢物語愚見抄）

〔鑑定〕 極札「近衛殿従一位関白大相国政家公新菟玖波 集作者（■／■）」

〔書誌〕 縦二二・二cm、横一三・八cm。

〔本文〕 朝臣哥也きえずはありともは花也
華と見ましやは雪也

十八 昔なま心ある女ありけり 心あるにてもなく又心なきにもあらぬを
なま心あるといふなま／＼しきよし也 おとこちかう

ありけり 女のはしちかなるをいふ
おとこにおそれぬ心なり 女哥よむ人なりければ心みんとてきく

の華のうつろへるをおりて 此女哥に心えたる人也中将の心をみんとて
きくの華に哥をそへてやれる也 おとこ

のもとへやる

紅にほふはいつらしら雪の枝もたは、にふるかともみゆ 紅にほふとは
うつろへる菊の

色をいふいつらはいつれなり又いつくといふ詞をいつらといふ所もある也たは、はたは
むなりとを、ともいふ五音通ずる也古今哥おりて見はおちしぬへき秋萩の枝も

たは、にをけるしら露とを、とかける本もある也此哥の心は紅に
うつろへる花と白雪のやうにたは、にさける枝とはいつれそとよめる也 おとこしら

〔伝称筆者〕 近衛政家（一四四四～一五〇五）。関白房嗣の二男。近衛家第一三代当主。『公卿補任』に記すところでは、寛正五年（一四六四）従三位権中納言に任ぜられ、文明七年（一四七五）内大臣、同八年右大臣、同十一年（一四七九）関白左大臣に転じ、氏長者・牛車兵杖を許される。文明一三年左大臣を辞したのち、同一五年関白も辞して散位となる。永正二年薨去。後法興院と号す。

〔解説〕 『伊勢物語愚見抄』第一八段の断簡である。ツレの断簡には、個人蔵古筆手鑑『あけほの』下所収（No. 14 第五六段末尾～五八段前半）『古筆学大成』第二三巻に掲載、第五六段末尾から第五八段前半分）、『国文学古筆切入門』（No. 81 第八四段）、出光美術館蔵古筆手鑑『濱千鳥』所収（No. 25 第一一四段）等がある。政家の真跡短冊と比較すると、書様が酷似し、内容からも真跡と認められるのではないか。

本断簡は、片桐洋一『伊勢物語の研究（資料篇）』（明治書院、一九六九年一月刊）に収める京都大学国語学国文学研究室蔵大永二年本を参看するに、表記以外に小異あり、本行一行目割注「行」ありともは「は」京大本ナシ。本行二行目割注「行」心なきにも、「京大本」心なきにても、本行六行目と歌本文「たは、」に傍記「とを、イ」とするが、京大本「とを、」、京都大学付属図書館谷村文庫本「たわ、」とする。本行八行目割注最終行「うつろへる」、京大本「うつろへは」とする。

（別府）

〔二〕 伝東常縁筆四半切（伊勢物語聞書）

〔鑑定〕 極札 A「東下野守常縁すなりにける（琴／山）」

B「東下野守常縁すなりにける（琴／山）」

〔書誌〕 縦二二・二 cm、横一三・八 cm。

〔本文〕 すなりにけること、わひたりける人の返

ことに 五条ワタリトハ前段ノ如ク女トハ二条后也エ、
ストハ不得也ワビケル人トハ樂殿后也カ、ルワリ

ナキ事ヲ思ヒソメテナト
憐愍ノ詞也

おもほえず袖にみなどのさはくかな

もろこし船のよりしいかりに

〔伝称筆者〕 東常縁（生年未詳、『和歌大辞典』に「文明一六」1688年頃には没したらしい」とあるが、これも未詳）。下野守益之の男。

東下野守常縁すまふけり



東下野守常縁すまふけり



すまふけりともわいり多人の也

こゝろ

大衆ワタリトテ如ク女トニ衆孤トテ
ストハ不得コトヒケル人トハ信ね居カレワリ

其事ヲ思ヒソメテナト
憐愍ノ切シ

もゆえす袖もくるとのきくくれ

ろくし船のりり

〔解説〕 『伊勢物語』第二六段の本文に漢字カタカナ交じりの注釈を割り込ませる形式の注釈断簡。

常縁を伝称筆者とする聞書の切には、書様や漢字片仮名交じりの注釈入りの形式を同じくするが、切全体の法量や

注釈の入れ方の異なる何種かがある。(二)(三)は縦の全長が同じだが、異なる写本の断簡である。(二)は上下に分な余白があり(本文の字高約17・2cm)、また注釈は本文の後に追い込む形式で、割書程度の大きさである。一方(三)は、上下の余白は非常に少なく(本文の字高20・5cm)、注釈も本文や和歌の注を必要とする部分の傍らに細字で入れる。(二)と形式の近似する断簡に、出光美術館蔵古筆手鑑『濱千鳥』所収(No.276 第一四段)があるが、全長が24・5cmで(本文字高21・5cm、推定)と、一回り大きく、注釈は割書ほどの大きさだが、本文や和歌の後に追い込まず、行替えて入れる。また(三)に近似する断簡に川崎市民ミュージアム蔵古筆手鑑『披香殿』所収(No.301 第一〇一段)があるが、全長が約19cm(本文の字高17・5cm)で、一回り小さい。『披香殿』所収のツレには『続国文学古筆入門』所収(No.81 第八二段)と手鑑『古今墨林』所収(No.165 第九六段)がある。

『古筆学大成』一三三所収の伝東常縁伊勢物語聞書切(図版八九〜九五)は、全葉同じ図版の大きさのため紛らわしいが、おそらく各々の法量が異なるのではないか(法量、分かるものは確認中)。また、同書では、伝東常縁伊勢物語聞書切の一群を、「伊勢物語聞書切と呼ぶべき」とする片桐洋一の所見を引用した上で、片仮名書きの注記の大半は鎌倉時代に限られること、注釈の内容が室町期の兼良や宗祇に始まる注釈ではなく、鎌倉〜南北朝に流行し、室町期にも影響力を残した古注の一系統であること等を理由に、これら聞書切の親本が、十三世紀に遡る可能性があり、伊勢物語の貴重な注釈切として評価する。そこまで異論がないが、続けてこれら聞書切の書写年代も十四世紀末まで遡るとするのはいかがか。伝称筆者の東常縁の短冊等と比較すると、連綿部分が少なく、やや右肩上がりの角張った豊満な字形、黒々と強い筆線といった一五世紀後半らしい書様がよく似ている。同筆とする確証には至らないが、書写年代は常縁の活躍期と同じ一五世紀後半と考えてよいと思われる。

(別府)

〔三〕 伝東常縁筆四半切（伊勢物語聞書）

〔鑑定〕 極札「東下野守常縁めくはせ（守／村）」

〔書誌〕 縦二二・二cm、横一三・八cm。

〔本文〕 めくはせよともたのまる

これは齋宮の物みたまひけるくるまに

かくきこえたりければ見さしてかへり

たまひにけりとなむ

むかしおとこかくてはしぬへしといひやり

たりければ女

白露はけふはけなゝむきえすして

〔伝称筆者〕 東常縁。断簡〔二〕と同。

〔解説〕 『伊勢物語』第一〇五段の本文にカタカナ交じりの注釈を割り込ませる形式の注釈断簡。〔二〕を参照。

東下野守常縁 めくもせ



和考しと自ら云ふ早稲下野守常縁
かゝるしとせりしは下野守常縁
と云ふは

これに赤雲の袖をこもいさるらるるまよ

かゝるこゝろにいさるらるるまよ

いさるらるるまよ

いさるらるるまよ

いさるらるるまよ

いさるらるるまよ

〔四〕 伝杉原宗伊筆四半切（伊勢物語・第二四段）

〔鑑定〕 極札「杉原宗伊といひて（守／村）」（三代古筆了仲）

〔書誌〕 縦二一・三cm、横一四・八cm。

〔本文〕 わかせしかことうるはしみせよ

といひていなむとしければ女

あつさゆみひけとひかねとむかしより

心はきみによりにしものを

といひけれとおとこかへりにけり女いとかなし

くてしりにたちてをひゆけとえをひつかて

し水のある所にふしにけりそなりけるいは

におよひのちしてかきつけゝる

〔伝称筆者〕 杉原宗伊（二四一八～二四八五）。俗名、杉原伊賀守賢盛。満盛の子、足利義政の近習衆。

連歌再興の七賢、宗砌・智蘊・心敬・専順・行助・能阿に加えられる一人、賢盛。『竹林抄』に作品が収められる。

〔解説〕 『伊勢物語』第二四段の後半部分である。典型的な定家本系天福本の本文で、まったく異なるがない。

ツレの断簡に出光美術館蔵古筆手鑑『聯珠筆林』所収（No.185 二七～二八段）、久曾神昇『物語古筆断簡集成』所集（No.44 第八三段）と（No.50 第九八段）等がある。

（別府）

秋原宗保 といひて



正の可くうとくはつとせよ
 とりていせうとくねと女
 ちよとよの衆とひ子とじつら
 白はきんぐらとあめは
 此よふれとやとくらと女とけ
 とをきりてとよとよとえとよと
 三よのちよとくらとよとよと
 にたよふれとくらとよとよと

〔五〕 伝平田墨梅筆四半切（伊勢物語・第二段）

〔鑑定〕 極札「平田墨梅 一つのまに（守／村）」（三代古筆了仲）

〔書誌〕 縦二三・六cm、横一五・二cm。桜花散らしの裝飾料紙

〔本文〕 一つのまにうつろふ色のつきぬらん

きみかさとは春なかるらし

むかしおとこ女いとかしこくおもひかはしてこと心な

かりけりさるをいかなる事か有けむいさ、かなる

事につけて世中をうしと思て出ていなむと

思ひてかゝる哥をなむよみて物にかき付ける

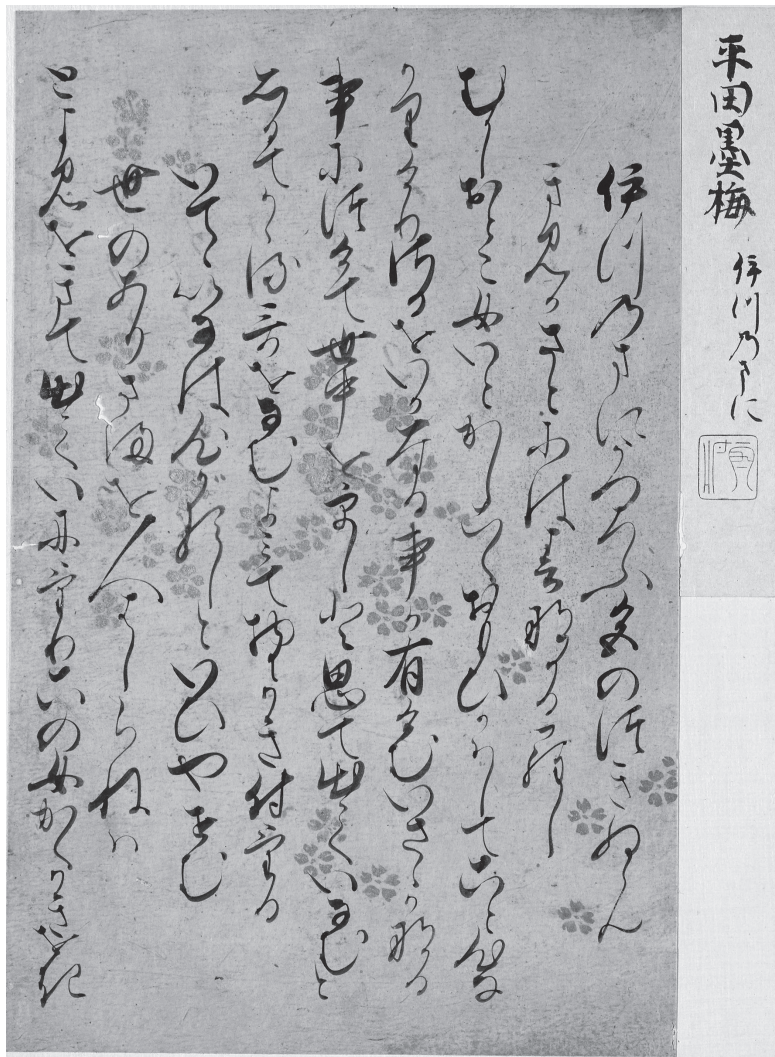
いて、いなは心かるしといひやせむ

世のありさまを人はしらねは

とよみをきて出ていにけりこの女かくかきをき

〔伝称筆者〕 平田墨梅（生没年未詳）。文明年間（一四六九～一四八九）に活躍した人で、飛鳥井雅親（一四一七～

一四九〇）の門人。墨梅を伝称とする古筆切には、徳川黎明会蔵古筆手鑑『玉海』所収の歌切、田中登編『平成新修古筆資料集』第五集所収の『源氏物語絵詞』切などがある。本断簡は、室町時代の古筆としては端正で温雅な書様の仮名書であるが、書写年代は十五世紀後半より少し下るように見える。時代もさらに下がるか。



〔解説〕 『伊勢物語』第二〇段末尾から第二一段の前半にあたる。典型的な定家本系天福本の本文である。（別府）

〔六〕 伝宗椿筆四半切 (伊勢物語注釈)

〔鑑定〕 極札「連哥師宗椿 そかに盗出し(守ノ村)」「(三代古筆了仲)

〔書誌〕 縦二三・七cm、横一五・八cm。

〔本文〕 そかに盗出し野州に是をみす野州下向其後宗祇

都より下向して野州に懇望して伝授す上洛して

一条太閤と談合いたしけつりた、して此一流あり

一 昔トハ凡物語ノ発端ニハイツレノ御時ト云歟 中比ノコトナト云歟 昔ノコトト云歟也

一 業平ハ御児ノ時ハ曼陀羅丸ト号シテ東寺ニ真雅ノ弟子ニシテカクレナキ名童ニテマシマセル也

上臈ハ十二歳ニテ元服スルモノナレト真雅ノヲシミ玉フニ

依テ十六歳ノ元服歟十二歳元服ノイワレハ一周年之意歟

一 かひま見てけりハ物ゴシ也 垣間ト書コトハカケトモ連哥ニテ居所ニキラハス

一 双紙ニハ四段ノ分別アリ地一ツ私一ツ双紙ノ本ノ詞ニ合テ申也 一 伊勢カ親ハ大和守小野ノ継陰

一 后 女御 更衣 内侍ト次第セリ 一 くりはらのを宗長ハばらをにこる兼載ハクリワラトヨメリ

一 文ニテハカヘリコト、ヨミ哥ニテハカヘシコトトヨム 一 かきつはたハ哥ニハ堀川百首ニハ春ニヨム連哥ニハ夏也

一 椎柴ハ連哥ニハ秋哥ニハ冬題ニ出ス也 一 ヲリキテト云コト乗物ヨリヲリタル躰也源氏ニモ車トイハネトモ

連宗師宗椿 不盗出



不盗出 野良の毛と云ふ野刺鳥の毛は宗師
初らりし向て野良の毛を以て傳授の上落

一条大岡北後合了りしけり於て是は一巻なり

一昔上ハ九輪流ノ表語ニイッシ四時トキ飲中此ノ一ナト云々 昔ノトキ後
一葉平ハ四時ハ曼陀羅丸ト号シ東寺真雅ノ弟子ジヤカシキ名童ニ云セシ
上巻ハ十二巻ニテ元服元モトト真雅ノ子ニ云フ

依テ十六巻ノ元服致十二止元服ノイハレハ一月年ノ意也

- 一久まはそそりハ物ゴシク恒アト書リハヤケに連々ニテ若雨キラス
- 一 双條三四段ノ分割アリ地ヲ私ニ双條カ洞ニ合ル一伊賀ノ親ハ和守小野ノ継隆
- 一 后女侍更衣内侍トテ身ヲセリ 一ケリクノと宗長ニ云ヒテ色哉ハワラトヨメリ
- 一 又ニハヤリコトヨミ分ニハヤニトヨム 一ツまばらハ川百首春ヨミ世考交之
- 一 雅は末ハ世分ニ故分ニ冬語ニ云々一ラリサトテテ家物ヨリテ元服ノ原由ニ車トハ子に
引入ルト云フ形多由アリ

引入ル、ト云所多由アリ

〔伝称筆者〕 宗椿（生没年未詳）。室町後期の連歌師。牡丹花肖柏の門人。泉州・堺の人で坂東屋と号す。連歌を牡丹花肖柏（一四四三～一五二七）に、和歌・物語を三条西実隆（一四五五～一五三七）に師事した。

肖柏の家集『春夢草』、二二四一の詞書に「此人和歌の道にふかく心をいれて、源氏物語を書く事廿部にをよべり。…にはかにわづらふことにてなく成侍、そのきはまで彼物語を書けるが、あさがほの巻にいたりてうせにしよしき、しかば」とあり、のちに『醒醉笑』にも引かれて有名な話になった。書を能くし、書流の系譜『本朝古今名公古筆諸流』に「連歌師 宗椿堺流 牡丹花門弟」とみえるように、書風は肖柏の影響を強く受けたものとされる。

〔解説〕 『伊勢物語』注釈、料簡の部分の断簡である。細字注の二行目右脇「依テ十」と書きさして擦り消しの痕あり。次行冒頭を誤記したもの。

（別府）

■源氏物語■

〔七〕 伝花山院定瀬筆大四半切（橋姫の巻）

〔鑑定〕 極札「花山院殿定瀬公にてうせ（守／村）」（二代古筆了任）

〔書誌〕 縦二三・八cm、横一一・八cm。

〔本文〕 こにてうせ侍にしのちと、せあまりにてなん

あらぬ世のこ、ちしてまかりのほりたりしを

この宮はち、かたにつけてわらはよりまいりかよふ

ゆへ侍しかはいまはかうよにましらふへきさまにも

侍らぬをれせい院の女御との、御かたなとこそは

むかしき、なれたてまつりしわたりにてまいり

よるへく侍りしかとはしたなくおほえ侍てえ

さしいて侍らてみやまかくれのくちきになりにて

〔伝称筆者〕 花山院定熙（二五五八〜一六三四）。本名家雅。右大臣家輔の男。『公卿補任』に「実前左大臣従一位藤公朝公男。母家女房」と注する。『補任』によれば、天正七年（一五七九）参議に任ぜられ、慶長七年（一六〇二）に権大納言に就いた後、元和五年内大臣に昇ったものの、その年末には辞任。さらに同七年正月二日には散位から右大臣に転じ、その一〇日後には辞任して散位となり、また寛永九年（一六三二）二月二四日に左大臣に転じ、これも四日後の

二八日に辞任した。公卿間での官職のやりとり、箔付けであったのだろうか。同二〇（一六三三）年左大臣に至り、寛永一（一六三四）年七七歳で薨去した。

花山院殿定頼公

こはてうせ



こはてうせゆあーのらうせあまらにんくせん
けいねせうあらうてまらあかりいんけん
あまらにんくせんけいねせうあまらにんくせん
あまらにんくせんけいねせうあまらにんくせん
あまらにんくせんけいねせうあまらにんくせん
あまらにんくせんけいねせうあまらにんくせん
あまらにんくせんけいねせうあまらにんくせん
あまらにんくせんけいねせうあまらにんくせん
あまらにんくせんけいねせうあまらにんくせん
あまらにんくせんけいねせうあまらにんくせん

〔解説〕『源氏物語大成』一五三九頁9行目〜13行目に相当する。

本文は定家本系で、表記等を除けば『大成』本文と異同がない。橋姫の巻、薫が宇治で弁の君から昔語りを聞き、自身の出生の秘密を知る箇所である。

ツレの断簡が、古筆手鑑が『古今墨林』（No.32 橋姫の巻）に所収。

（久下）

〔八〕 伝正親町公叙筆大四半切（浮舟の巻）

〔鑑定〕 極札「正親町殿公叙卿いと、そ（守／村）」（二代古筆了任）

〔書誌〕 縦二六・五cm、横一七・二cm。紅葉散らしの装飾料紙。

〔本文〕 いと、そねありぬる気色をみ給てまたせんやうもなけ

れは忍ひやかにこのかうしをた、き給ふ右近き、つけて

たそといふこはつくり給へはあてなるしはふきとき、しりて

との、おはしたるにやと思っておきていたりまつこれ明よとの

給へはあやしう覚えなき程にも侍かな夜はいたう更ぬらん物を

といふ物へわたり給へかんなりとなかのふかいひつれはおとろかれつる

ま、にいてたちていとこそわりなかりつれまつあけよとの

給こゑいとようまねひにせ給て忍ひたれは思もよらすか

正親町殿公叙卿



いとと孫わんわん 宗文とと孫ともきん
 建い並しやふをれ 孫とと孫く右並とと
 孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと
 孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと
 孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと
 孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと
 孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと
 孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと
 孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと
 孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと
 孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと
 孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと
 孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと孫とと

ひはなつ道にていとわりなくおそろしきことのありつれば

あやしき姿に成てなん火くらうなせとのたまへハあないミシ

とあはてまとひて火ハとりやりつ我人に見すなよきた

〔伝称筆者〕 正親町公叙(一五一四～一五四九)。権大納言実胤男。母は三条西実隆女。天文四年(一五三五)に正四位下参議、同七年従三位権中納言に昇り、同一五年従二位権大納言、同一七年正二位に至る。天文一八年に三六歳で薨去。公叙を伝称筆者とするもので他に「狭衣物語六半切」がある(藤井隆「古筆切と狭衣物語」『講座平安文学論究 第五輯』風間書房、一九八八年一〇月)。

〔解説〕 本文箇所は浮舟の巻。定家本系統。『源氏物語大成』底本(池田本)と異同はない(但し、1行目冒頭「いと、そ」は「いと、う」の誤写か)。『源氏物語大成』一八七二頁5行目～14行目に相当する。

物語場面は、匂宮が薫に似せた声色で右近を欺き、浮舟の寝所に入ろうとする箇所である。(久下)

同じ伝称筆者で、同筆と思われるほど書様が酷似し、縦の法量もほぼ同じ以下の断簡がある。『古筆学大成』二三卷所収(No.54 五行)、『古今墨林』所収(No.69 九行)、前掲古筆手鑑『濱千鳥』所収(No.68 六行)。いずれも浮舟の巻であるが、この三葉の料紙には装飾がない。冊子の全丁が装飾料紙とは限らないことを考慮すれば、本葉のツレの可能性もある(とすれば、本葉の十一行が一面の行数)。(別府)

〔九〕 伝光源院義輝筆大四半切（源氏物語）

〔鑑定〕 極札「光源院義輝公ふらへき（守／村）」（二代古筆了任）

〔書誌〕 縦二六・〇cm、横一九・六cm。桜花散らしの裝飾料紙。

〔本文〕 ふらふへきをなにかしこのてらにこもり侍り

とはしるしめしなからしのひさせ給へるをうれ
はしくおもひたまへてなんくさの御むしろもこ
のはうにこそまうけ侍へけいとほいなき事と
申給へりいぬる十よ日のほとよりわらハヤミに
わつらひ侍るをたひかさなりてたへかたく侍れ
は人のをしへのまゝにハかにたつねいり侍りつ
れとかやうなる人のしるしあらはさぬ時はした
なかるへきもたゝなるよりハいとおしうおもひ
給へつゝみてなんいたうしのひ侍りつるいまそな
たにもとの給へりすなハち僧都まいり給へりほう

〔伝称筆者〕 足利義輝（一五三六～一五六五）。室町幕府一三代將軍。第一二代將軍足利義晴・慶寿院（近衛尚通女）の間に生まれ、天文一五年（一五四六）、一歳にして將軍職を父より継承したが、管領細川晴元との戦いに明け暮れて、近江に亡命、同一七年に晴元と和睦して帰京を果たした。その後も晴元の家臣・三好長慶の反逆に遭い、しばしば近江に逃れた。長慶の死後、親政を行おうとするが、永祿八年（一五六五）、二条御所にあるところに松永久秀らよって攻められ、自ら抜刀して戦ったが討ち死にした。

〔解説〕 若紫の巻、『源氏物語大成』一五九頁③～⑩に相当する。

同じ伝称筆者で、書様が酷似し、縦法量もほぼ同じ断簡に、『古筆学大成』所収（No.12 五行）、『古今墨林』所収（No.158 九行）、出光美術館蔵古筆手鑑『聯珠筆林』所収（No.173 八行）、林原美術館蔵『日本古筆手鑑』所収（No.197 九行）、川崎市民ミュージアム蔵手鑑『披香殿』所収（No.276 九行）、個人蔵があり、いずれも、本葉と同じ若紫巻の断簡であるが、これらの料紙には装飾がない。冊子の全丁が装飾料紙とは限らないことを考慮すれば、ツレの可能性もある。また、装飾が後入の可能性もある（とすれば、本葉の十一行が本来の一面の行数）。なお、図版は未確認だが、伝称筆者と内容巻が同じ、古筆手鑑『も、ちどり』所収切も同様と推察される（小島孝之『成城国文論集三三五号』。一方、書様が近似はするが異なり、縦の法量が一回り小さな断簡（23～23・5cm）に、石川県立美術館蔵手鑑所収や出光美術館蔵古筆手鑑『濱千鳥』所収（ともに一面十行）があり、こちらの内容は竹河巻である。『古筆手鑑大成』十三卷『石川県立美術館蔵手鑑』所収の解説では、本葉他の若紫巻断簡と竹河巻断簡を本来一具とするが、法量や一面の行数が異なる別の写本である。

（久下・別府）

■ 狭衣物語 ■

〔二〇〕 伝蜷川親當筆大四半切（狭衣物語）

〔鑑定〕 極札「蜷川親當^{まで}二つ、（守／村）」（三代古筆了仲）

〔書誌〕 縦二・五・四cm、横一・八・八cm。桜花散らしの裝飾料紙

〔本文〕 まて一つ、心ミむとのたまハするを春宮も興あ

ることとのたまハせてさまくの御こと、もたてま

つりわたす中納言ひハ兵衛督しやうのこと宰相中

将わこむ中つかさの宮の少将しやうのふえ源中将に

よこ笛たまハすた、今ゆしきもの、上手ともなる

へしをのくこよひもの、ねとも手をつくしてき

かせよと仰らる、をたれもひとつにかきませてこそあ

やしさもまきらハしてつかうまつらめいとわりなきわさ

かなとうけ給ハりにく、わひたまふなかに源中将は

さらによろつのことよりもたハふれにたにまねひ侍ら

ぬものをとそうし給をた、そのしらさらむことをこよひ

蜷川親當 まで一紙



まて一紙心むしつるあはれく春又も興あ
れし中へしまらせく海のこし言もて
つれごと中納言いひ言流播屋や入るて中
將といひ中つる人交るす将一やうのつ源將
しし節を海をそとむともむしつるあはれく
遊一七のくう人いしつるあはれく
せし作らむとむしつるあはれく
や一まらせく海をそとむともむしつるあはれく
れし中へしまらせく海のこし言もて
つれごと中納言いひ言流播屋や入るて中
將といひ中つる人交るす将一やうのつ源將
しし節を海をそとむともむしつるあはれく

〔伝称筆者〕蜷川親当(？)文安五(一四四八)年は、將軍足利義教に仕え、政所代となる。義教没後、出家して智蘊を名乗る。連歌師として著名で、連歌七賢の一人である。

〔解説〕 当該断簡も、桜花・松葉を散らした装飾料紙で、古筆手鑑『古今墨林』『披香殿』、『古筆学大成24』などがある。本文はいずれも巻一で、現存写本では鷹司本(書陵部蔵)とほぼ天地を同じくする書写で、同本文であるところからすれば、共通祖本の写しであつて兄弟本である。ただ5行目の「ゆしき」は「ゆ、しき」であり、一箇所誤脱がみとめられる。

同じ伝称筆者で、同筆と言えるほど書様が酷似し、縦法量もほぼ同じ断簡に、『古筆学大成』二四所収(No.12 五行)、『古今墨林』所収(No.168 八行)、前掲古筆手鑑『披香殿』所収(No.303 九行)、徳川美術館蔵手鑑『集古帖』所収(No.118 六行)、春日井市道風記念館図録『国文学と古筆』所収(No.39、70 五行)、前掲『日本古筆手鑑』所収(No.198 六行)等がある。いずれも料紙には装飾がないが(『披香殿』所収切には、解説に言及はないが、図版を見ると下方に松葉の文様跡が認められるように思われる)、冊子の全丁が装飾料紙とは限らないことを考慮すれば、本葉のツレの可能性もある(とすれば、本葉の十一行が本来の一面の行数)。

(久下・別府)

〔二一〕 伝阿仏尼筆六半切（狭衣物語）

〔鑑定〕 極札「四條局阿佛ち給はしと（守村）」（二代古筆了任）

〔書誌〕 縦一五・二cm、横一五・四cm。装飾料紙。

〔本文〕 ち給はしとたけうおほさるゝ物からいかはかりの御心にてとし月ふれとつれなき

御けしきならんとけふハいますこし

うらめしきもたくひなければ雲のかよ

ひちさへあとたへてのちハいとゝやるかたな

き心のうちなとこまやかにぬれと

よへのありさまひとりみ侍しもあはれなる

事おほくなどやうにて

としつもあるしることなるけふよりハ

〔伝称筆者〕 阿仏尼（？）（二二八三）は藤原為家の妾。冷泉為相の母。鎌倉後期の女手と思われる物語断簡には阿仏尼

を伝称筆者とするものが少なくない。

四條房阿佛

ら流るる悦



ちねんしやちひらおのきりてつていりて
 くるはぬらんう月を射とつれなき
 ぬきしはせんしとをふらつたはひ
 ちかやももきつるちをれと雲はひ
 ひらき入るてそのちひらやうるな
 きんのちひらとにやうなるぬれを
 くのちひらぬるちをちあるぬる
 ちねんしやちひら
 うにぬらちをてとちらぬる

〔解説〕 当該断簡は、金銀泥ですすき・女郎花・紅葉などの折枝を散らし、さらに飛翔する鳥を描く装飾料紙を特徴とし、『古筆学大成24』の「伝阿仏尼筆」図版77・78・79、川崎市市民ミュージアム蔵手鑑『披香殿』（淡交社）に貼られた断簡のツレと認められる。それらがともに巻四の切であることも共通している。

本文は諸本との異同が二箇所（2～3行目「つれなき御御けしきならんと」―「変らぬ御心のつれなさならんと」、六行目「心のうちなど」―「心の中などばかりに」）ある。

当該断簡の相当箇所は小学館『新編全集』②三八一頁で、その内容は狭衣と女二の宮（入道の宮）との若宮が兵部卿となり、その成長ぶりをともに祝えない現況に、狭衣が女二の宮への思いを今さらながらに募らせる場面である。

狭衣断簡で装飾料紙のものというと阿仏尼に筆者が擬定されることが多いらしい。参考図版として、同じく二代目了任に阿仏尼筆と極められた断簡をここに示しておく。国文学研究資料館「九九―一三二六」。

（久下）

